



お嬢様と悪女：比較文学的に考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14523

第4回講演

お嬢様と悪女

——比較文学的に考える——

堀江 珠喜

「悪女」と聞いてどんな女性を連想されるだろう。現実には「悪女」は男性社会にとって不都合な存在であっても、芸術においては魅力的な妖婦として描かれてきた。文化の爛熟した時期にはチャンピオン級悪女というべき「ファムファタル」のテーマが流行する。いっぽう高嶺の花の「お嬢様」も男性社会にあっては普遍の人気を保つ女性像だ。もっとも現代日本では「お嬢様」は「絶滅危惧種」ではあるが。もともと私は約30年前に『サロメ』で博士論文を執筆するなど「ファムファタル」に興味を持ち「悪女」について研究、執筆、講演をしてきた。だが最近、「お嬢様」に関心を抱くようになった。しかし考えてみればサロメは王女、つまり最高位のお嬢様だ。「お嬢様」が悪女パワーを発揮したら？　そこでいくつかの文学作品を中心に、悪女としてのお嬢様論を展開したいのである。

《悪女とは》

もともと「悪女」は「顔・かたちの醜い女」を意味し、「悪女の深情け」は「醜女の深情け」とも言った。見るからに悪いやつはやっぱり本質も悪いとの、物語の初段階的発想から「性格の良くない女」の意味にも使われる。多くの国語辞典では、この二つの定義を載せているが、最近では「色香で男の心を惑わす女」との新定義が加えられていることもある。

おそらく現代の我々が「悪女」と聞いて連想するのは、この三番目のタ

イブであろう。自分の魅力を武器に男性の心を操り、男性社会でのし上がり、自己実現を遂げる——物語では輝かしいエネルギーなヒロインとして登場できる女性だ。(ちなみに日本語の「悪」には「元気な」や「強い」の意味もある。悪女はパワフルでなければ男性社会では生き残れない。)しかし、ときとして男性には都合の「悪い」女でもある——だから「悪女」なのだ。

さて、小説、テレビドラマ、映画に主演として登場する「悪女」は、「007」シリーズのボンドガールよろしく色香、セクシーな魅力で男性に近づく場合が多い。私自身、2003年に『男はなぜ悪女にひかれるのか——悪女学入門』を平凡社新書として出したときには、主にこのタイプの女性を念頭に置いていた。だが、セクシー悪女とは対極にあるとおぼしき清純そうなお嬢様タイプのほうが、実は男性に警戒心を抱かせることなく、かつ彼らに憧れられながら、男性社会で自己実現を果たしやすいのではあるまいか——こう考えるようになったのは、ある時、某比例代表制選挙区で、政治経験がゼロに等しく有名ともいえないお嬢様タイプの候補者が某大政党の一位に指名されたためだ。その状況なら選挙前から当選確実である。日本経済新聞の男性記者によれば、彼女はその地域の有力財界人の愛人だとか。だからこそ当選後は一切マスコミに出ない——と聞けば、すべての辻褄が合う。(こんな形で某氏の「愛人手当」に毎年我々の税金が一億円使われているとしたら大問題である。)彼女のようなタイプは私の悪女カテゴリーにはなかったが、これこそが現実なのである。「お嬢様」タイプの悪女は、ロイヤルストレートフラッシュ級裏技を使うのだ。

《おきれいなお嬢様》

では「お嬢様」とはどんな女性なのか。各々が抱くイメージはかなり異なるだろうか。ここでちょっとした「お遊び」をしてみたい。「お嬢様」に修飾語をつけていただきたいのだ。あまり深く考えず、さっと頭に浮かんだ言葉、たとえば「可愛い」や「田園調布の」、「お転婆な」などでかまわない。2012年11月17日の講演会場では「大きな屋敷の」という意見があった。確かに「お嬢様」にマンションは似合わないかもしれない。これ

より一年前に船場の老舗社長（昭和3年生まれ）に、この修飾語について尋ねたところ、「おきれいな」、「お美しい」、「お優しい」という言葉が即座に返ってきた。そこで私は少し意地悪く言った——「でもなかには不細工なお嬢様もいらっしゃるのでは？」これに対し、八十歳を越えた社長は、こうきっぱりと言われた——「そんなのはお嬢様ではない！」

この意見を私なりに解釈すると「お嬢様は美しくなくても美しく見える、そんなオーラがある」のだ。だから「お美しい」のである。「美しい」と「お美しい」とでは微妙にニュアンスが異なる。「お」によってエレガンスが付加されるのではあるまいか。つまりお嬢様には、いわば「品格」が備わっていると考えられよう。

谷崎潤一郎は『痴人の愛』（1924-5）で、夏、主人公・譲治がナオミを連れ、贅沢な鎌倉旅行を試みる場面がある。ところが汽車に乗ったときから、あたりのセレブな雰囲気次のように圧倒されてしまう——「勿論夏のことですから、その夫人達や令嬢達もそうゴテゴテと着飾っていた筈はありません、が、こうして彼等とナオミとを比べて見ると、社会の上層に生まれた者とそうでない者との間には、争われない品格の相違があるような気がしたのです。」果たしてその品格が「生まれ」、すなわち血筋によるか否か——私はむしろ「育ち」や「環境」によって「お嬢様」は作られて行くと考える。英国でも「紳士を作るには三代かかる。淑女は単なる環境で作られる」という格言がある。だからこそシンデレラやマイ・フェア・レディの物語が成立するのだ。従って『痴人の愛』のこの光景も、上流夫人オーラは車両に満ちていたかもしれないが、令嬢たちは高級な身なりや母親による躰によって「お嬢様」に見えていたのではないかと想像する。

このように私が「お嬢様」という存在になんとか懐疑的なのは、自分自身が良くも悪くも「お嬢様学校」と呼ばれた神戸女学院に12年間在学したためだ。少なくとも中高部で我々は「お嬢様」扱いされた。中学入学手続きの書類には「この度、ご令嬢をお預かりするにあたり…」との文言が記されていたのを記憶しているし、教師は個人懇談会などで保護者に対し「お嬢様は…」という言葉を使った。たとえば私の先輩が中学2年時、

その母親が娘のヘアスタイルについて担任に相談したときのことである。「お嬢様がパーマをかけたいとおっしゃる？それはお嬢様がご自分にパーマが似合うとお思いになるからではございませんか？一度かけさせておあげになったらいかがですか？」とアドヴァイスされたとか。母校は中学から私服通学である。化粧・毛染め・和服は禁止。（ズボン類も禁止だったが我々が高3のとき署名運動して解禁にもらった。もっともそれ以前から平然と我々は規則を破り、パンタロンやジーンズを着用していた。勉強である程度の成績を維持していれば、その他のことにはうるさく言われない自由な校風だったのだ。）パーマメントも許されてはいたが、「中2では早すぎる」と判断した母親が、同様の見解を担任教師に期待したのだ。だがこの教師こそ外交官を父に持ち英国で育った元お嬢様だったから、感覚がいわゆる日本人離れしていた。

では本当に生徒たちに「お嬢様」はいたのだろうか。確かに一学年150人中2～3名は存在したようだが、彼女らは決して「お嬢様」であることをわざわざアピールしなかった。いつも自然体で、自慢するわけではないが、時折その発言が「普通」でないのだ。たとえば、ふと、「広い家って嫌ね。住むのが大変だわ」と溜め息をついたりする。日本は住宅事情が悪く「ウサギ小屋」と呼ばれていた時代である。何と嫌味など思われそうだが、これは彼女の素直な意見だった——後年に調べたところ、当時の彼女の家の敷地は近くの小学校より広がった。戦前のようには使用人を雇えない時代においては確かに住み辛かっただろう。彼女こそ「大きな屋敷のお嬢様」だったのである。そして「お美しい」方だった。もちろん勉強もできる。これだけ揃えば性格も良くなるに決まっているのではあるまいか。

ついでながら阪神間の他のお嬢様学校・甲南女子高等学校の友は、誰かれなく「六甲山の別荘へ遊びにきてね。貴女の家のお別荘はどこ？」と無邪気に尋ねるし、小林聖心女子高等学校の友とは私も「ごきげんよう」と挨拶していた。こんな環境にいれば誰でも「お嬢様」を演じる能力が多少は身に付く。いや、努力により偽物のほうが本物以上に「本物」に見えることもあるかもしれない。

《雪穂と公子》

大阪府立大学工学部出身の推理小説作家・東野圭吾は『白夜行』（1999）で、貧しく下品な家庭に生まれながら「お嬢様」を懸命に演じ自己実現を果たすヒロイン唐沢雪穂を描いている。彼女は『風と共に去りぬ』のスカレット・オハラに憧れ、自分の「お嬢様」タイプという強味を武器に周囲の者達を操ろうとするのである。興味深いのは、（映像化されたときには名家出身のお嬢様という設定の）清華女子大ソーシャルダンス部部长倉橋香苗は煙草を吸い、あばずれのような口をさく。彼女は雪穂を「お嬢様」タイプに分類するのだが、本物の御曹司で永明大学のソーシャルダンス部部长・篠塚一成は他の男子学生たちが大はしゃぎするほどには雪穂に関心を持たない。彼はむしろ雪穂の目立たない親友・江利子に魅せられた。江利子は名門出身ではないが、雪穂の出自に比べれば「お嬢様」に近い。そして一成は彼女ら二人に会った後、雪穂を「単なるお嬢様」とは思えずこう考えるのだ——「彼女の目には、言葉ではいい表せないような微妙な刺が含まれていた。だがダンス部の部長が自分を無視して友人とだけ話していたからプライドを傷つけられた、というわけでもないようだった。あの目に宿る光は、そういう種類のものではなかった。あれはもっと危険な光だった、というのが一成の感想だ。貧しさを秘めた光、ともいえた。そして本物のお嬢様ならば、ああいう光を目に宿らせることはないはずだ」

一成自身、本物の「お坊っちゃん」だからこそ「本物」と「偽物」とを見分けられたのかもしれない。（ついでながら、前述のように「お坊っちゃん」にも修飾語を付けてみて欲しい。会場からは「女性関係にだらしないお坊っちゃん」という声があり、講演後、一人の60代男性から「僕の親父はまさにそんなお坊っちゃんまで、死後、金庫を開けたら手切れ金の領収書が何枚も出てきました。女性たちには現在の貨幣価値の約一億円ずつ渡していたようです」と言われた。そして、しかるべき手切れ金を渡して清算するのが「お坊っちゃん」であるとか。）

「偽物」だからこそ、「本物」以上に「本物」ぶらなければならないのは、ニューハーフにおいても同様であろう。本物の女性以上に「女らしく」なかったら、彼（女？）らは、ただのオジサン、オニイサンたちなのだから

ら。しかし本物の女性は、どんなに（世間で言うところの）女らしさに欠けていても、女性である事実には変わりはないのだ。

そこで偽物が本物のお嬢様のふりをして周囲の人々を操り、八百屋の娘（鈴木君子）から田園調布に屋敷を構える実業家（富小路公子）にのし上がるさまを描いたのが、有吉佐和子の『悪女について』（1978）である。この作品が発表されたのとはほぼ同時にテレビドラマ化され、私は興味深く視聴したが、これまで自分の「悪女論」において、この作品を取り上げたことはなかった。ひとつには、公子の不思議な死後、彼女の知人・家族たちが次々にインタビューを受け、徐々に彼女の人物像が解き明かされるという見事な手法で物語があまりにも完結されており、議論の材料には向かないように思われたためだ。またタイトルが『悪女について』と、あまりに直接的で、「悪女」について語るのに『悪女について』を使ったのでは、論者として芸が無いようにも思われた。さらには、公子のお嬢様タイプが、私が考えていた悪女タイプではないので、意図的に避けていたことも事実である。

だが、お嬢様タイプの悪女について論じるならば、この富小路公子に注目すべきである。彼女は八百屋に貫われて育てられたが、実は高貴な血筋のお嬢様であるという貴種流離譚の嘘を周囲に信じさせる。それほど彼女の立ち居振る舞い、言葉遣いは優雅だったのだ。若い頃、夜学に通い、同級生の男性（早川）に連れられ居酒屋に行き、焼酎に梅酒で味をつけたと聞いて「まああ、そう。じゃ、強いんですね。私、大丈夫かしら」。しかし酔うこともなく、復員兵くずれに絡まれそうになると、「晩くなりますからお先に失礼させていただきますわ。両親が心配いたしますので。ご免遊ばせ」。

この「ご免遊ばせ」には「柄の悪い中年男を呆然とさせる効果」があった。そして早川が乃木坂の屋敷に彼女を送って行く。彼女はその「大きな屋敷のお嬢様」のふりをして、こう言った——「今夜は本当に有りがとう存じました。晩うございますので父や母が御挨拶するのは別の機会にさせていただきますけれど、話せばきっと感謝すると思いますわ。…ごきげんよう。おやすみなさいませ」

この言葉遣いと豪邸とで、早川は公子を「高嶺の花」と思い込む。だが実は父親が事故死し公子は母親とともに近くのこの豪邸に住み込み、昼間は家事をし夜学に通っていたのだ。この屋敷の娘・雪子は公子と小学校が同級で、幼い頃から公子がよく遊びに来ていた。お嬢様は青山学院中学に進み、公子は当然ながら公立中学に入った。それでも青山学院の行事にもこの家にも公子は訪れ続けた。おそらくは青山学院の上流階級の校風に親しみ、華族出身の雪子の母親の雰囲気や学ぶためだったのだろう。公子の「まああ」は、雪子の母親の口癖「まああ」を真似た、つまり元お姫さまを生きた教本として、公子は「お嬢様」演技術を修得したのである。

《本物と偽物》

やがて努力、商才と巧みな嘘、そしてこの「お嬢様」術で、公子は社会の階級を駆け上がる。洋服はオートクチュールである。そのデザイナーと、再婚用のウェディングドレスを作るにあたり、小さな白いバラの花を全身にあしらう相談をする。公子は本物のバラを希望するが、デザイナーは、こうアドヴァイスした——「でも本ものの白バラは傷がつきやすく、それが目立ちますし、却って穢らしく見える心配がございます。造花の方が本ものに見えると思いますよ」

これに対して公子は「まああ。面白いわね、造花の方が本ものに見えるなんて」とコメントする。この一文こそが、この物語の本質を見事にまとめている。要するに「偽物」のほうが「本物」に見えるということなのだ。

この理論をユーモラスに表しているのが第15章「烏丸瑤子の話」である。烏丸は堂上華族出身だが、これ見よがしに柄が悪い。どんなに柄が悪くても旧華族であることは事実なのだから、逆説的に言えばお嬢様で柄の悪い言葉遣いをするのは、本物のお嬢様の特権なのだ。ちょっと長くなるが社交クラブで烏丸と公子とが出会った後のやり取りが、柄の悪い「本物」と、上品な「偽物」との対比を鮮明に表しているので、次に引用したい。

「私、綾小路さんのお嬢さんかと思ってたのよ。富小路って、変な苗

字だね。京都の町みたいじゃないさ」

「本名は富本なんですけれど、平凡ですから、富小路と名乗ってますの。これだと、すぐ名前を覚えて頂けますから。まず名を覚えて頂くのが大事なことでございましょう？」

「でも偉いね、あなたみたいに若くて社長さんだなんて。宝石屋さん？」

「はい。いえ、宝石の方は余技でやっておりますけれども、レストランとか、いろいろ、まだ勉強中でございます」

「なんていうレストラン？」

「モンレーブと申しますけど、奥様にいらして頂けるような立派なレストランじゃございませんわ。でも、近々拡張工事を致しますから、そのオープニングにお出まし頂けたら光栄ですわ」

「光栄だなんて、やめてよ。昔は華族だったって、今は働いて食べる貧乏人なんだからさ」

「まああ」

「それより、今日の会はたまんなかったね。私の両隣ときたら、ほら、こんな名刺くれたわよ。これ、サカサクラゲじゃないの」

「まああ。あの痩せてらした方ですか？」

「ううん、デブチンの方」

「まああ」

谷崎が『痴人の愛』を執筆した頃とは違い、富小路公子が生きた時代は、戦後のニューリッチが社会進出し、「本物」オーラを持つ者が激減し、偽物が巧く演じても見抜ける者がいなくなってきたのかもしれない。現代日本社会において「格差」が問題視されている。だが戦前の「格差」は明文化された身分差別とともに存在した。もちろんトップクラスは天皇を長とした皇族とその藩屏たる華族であった。従って戦前や昭和の中期までは、このような家系に連なる娘に、まず「お嬢様」の資格が与えられたのではないか。しかし皇・華族の大部分は東京在住であった。つまり関西には、京都に堂上華族が少し残ってはいたものの、それ以外はほとんどいなかったことになる。そこで関西の「お嬢様」は中流上部に属していたと考

えられる。『細雪』の蒔岡家も中流上の暮らしから没落した一族である。それでもあれだけのライフスタイルが謳歌できるのだから、戦前の中流上とはかなり裕福な階級であったわけだ。そのような阪神間の大ブルジョワの息子のもとに、東京や京都などの華族令嬢が嫁ぐことはあった。山崎豊子著『華麗なる一族』（1973）の万俣大介は京都の堂上華族から妻を迎えている。『細雪』でも華族との縁談がある。戦前の平民であっても華族と縁続き、もしくはそうなる可能性のある家の娘は「お嬢様」であろう。

《優雅な女性》

さて『悪女について』の第18章の「宝石職人の話」では、「おかしなもので、女王さまになるように生まれてきた筈で、血統が上等なのに、まるきり宝石の似合わねえ女がいるのよ」と、エリザベス女王とメリー女王を比べて毒舌を並べる一節が面白い。メリー女王については「あの方こそ宝石のために生まれてきた王妃さまだよ」と誉め、「それに較べると悪いけど、今のエリザベスさんは、似合わないね」と辛辣コメントだ。

本来メリーはエドワード皇太子の長男と婚約していた。まだ19世紀ヴィクトリア朝だったので将来の王妃に相応しい、生まれながらにプリンセスの称号を持つメリーが選ばれたのだ。しかし婚約相手が病死したため、弟のジョージと結婚し、エドワード七世の死後、ジョージ五世の妻として女王になった。いずれにせよメリーはクイーン要員だったのだ。しかしエリザベス女王の母でジョージ六世の妻は、もともと王妃になる予定ではなかった。そのため貴族とはいえ低いランクの出身だがジョージ五世の次男となので結婚できたのである。ところがエドワード八世がシンプソン夫人と正式結婚を望んで退位したため、突然、王妃になってしまった。その娘のエリザベス女王は、本来は王妃になれないレヴェルの母の血統をもつているのである。もし「宝石が似合う女」により高貴さが求められるとしたら、メリー女王とエリザベス女王の差は、この歴史的事実で説明がつこう。どんな世界にも上下関係は存在し、王侯貴族においても、それは例外ではないのだ。

けれどもこの職人は、我らがヒロインについてはこう絶賛する——「そ

こへいくてえと、富小路公子ってのは、鈴木君子の時代から、宝石が似合う女だった。若い頃から、その似合い方は、大したものだったね」。これは公子の子供時代からの努力の賜物であろうか、それとも八百屋の娘の突然変異なのだろうか。いずれにせよ、血筋と品格とに、結局は因果関係が成立しないことが力説されているようだ。

公子はお嬢様演技を修得し、自己実現をとげた「悪女」だ。周囲は彼女に振り回されたが、彼女を「ファミファタル」とは呼びたくない。「ファミファタル」とは「男を死に至らしめかねない悪女」で、たとえば冒頭で述べたサロメや『白夜行』の雪穂などである。彼女たちのように積極的に男を死に追いやるファミファタルもいるが、本人にはそのつもりはなかったのに結果として愛する男が死んでしまう、そしてその直接的原因を作ったのがその女性というケースもある。そのような女性が「悪女」とは言いにくい、「ファミファタル」に分類する説もある。

たとえば三島由紀夫の『春の雪』（1968）で、聡子は堂上華族の「お姫様」だ。宮家との縁談が進んで行くいっぽう、二歳下の侯爵家長男・清顕と愛し合う。優雅はみだらさを恐れない。情事の後に清顕が身じまいを終えると、聡子は手を鳴らし、老女を呼び着衣の手伝いをさせる。これこそが「お嬢様」の最高ランク「お姫様」のやり方だ。情事の最中も老女は手を鳴らせば聞こえる所に控えていたことになる。聡子は懐妊し、密かに中絶手術を受けた後、皆の反対を押し切って仏門に入ってしまう。宮家との話を破談にしたのだ。清顕は聡子との再会を願って寺へ日参するが門前払いされ、風邪をこじらせて肺炎で亡くなる。この結末に注目するなら、聡子は「ファミファタル」であろう。しかも最高位お嬢様ファミファタルといえよう。だが正直なところ、「ファミファタル」や「悪女」をヒロインにした作品には、聡子のようなキャラクターは人気を博さない。もっとパワフルにのし上がって行く偽お嬢様のほうが、より魅力的で、庶民の共感を得やすいのではあるまいか。

《お嬢様十カ条》

このように悪女あるいはファミファタルのお嬢様、またはお嬢様タイプ

の悪女・ファムファタルを見てきたのだが、最後に「お嬢様とは？」を皆様と考えていただきたい。真剣に議論するのではなく、仲間で盛り上がる話題のひとつにしていただけたら嬉しい。（『サンデー毎日』のある女性記者によれば最近の若者たちの間では「最後の晚餐」、つまり死ぬ前に何を食べたいかとのブラックなネタが流行っているとか。これも深刻に考える必要のない状態、すなわち健康な若者たちならではの話題なのだろうが、意外にも人気のあるのが「塩むすび」、中に具の入っていない握り飯なのだそうだ。）

「お嬢様？カ条」として、？はいくつでもいいので、自分の感覚で「お嬢様（に）は…（で）ある」といった短い文章で、決めつけてしまうのである。例外的な存在はとりあえず無視すればいい。理屈は後から補えばいい。おそらくさまざまな文学作品、ドラマ、映画、アニメ、漫画、あるいはこれまでの体験や日常生活などから、その定義に相応しいキャラクターが見つかるだろう。私はこれから十カ条を挙げることにする。それ以上に思いつくが、きりの良いところで無理にでもまとめてしまうほうが説得力が増す。お嬢様に対しては、個々、異なったイメージを抱いていても当然なので、他者の意見に賛同する必要はない。正解があつてないようなもの、答えは複数、それが理系と違う文学の楽しさ（ときには難しさ）と、割り切っていただきたいし、私への反論も大いに歓迎である。では始めよう。

- 1、お嬢様は美しくなくても「お美しく」見えるのである。（つまりそのような雰囲気、ときにはオーラがあるのだ。たとえばスカーレット・オハラは美人ではなかった。）
- 2、お嬢様には品がある。（品格とまで言えるかは疑問である。なぜならまだ成長段階にいるからだ。しかしとりあえず経済的心配がないというだけでも品性に良い影響を与えないはずがない。ただし現代日本で、いわゆる「お坊っちゃん顔」が散見できるほどには「お嬢様顔」を見ることがない。母校・神戸女学院においても同様であった。何故だかはわからない。同性が見る目は厳しいのかもしれないし、前述し

たように、女性は「環境」によって作られることの好例であるのかもしれない。(ちなみに私の勤務する大阪府立大学では20年前に比べて「お坊っちゃん顔」の男子学生が増えているが、ファッションセンスは良くなっても「お嬢様顔」を認識することはない。社会が民主化されたためだろうか。もちろん本物のお坊っちゃんでも「お坊っちゃん顔」を持たない者もいることは政財界大物の個人名を挙げるまでもなく衆目一致するところではあるまいか。)

- 3、お嬢様は周囲への気遣い(とりわけ目上より目下への配慮)ができる。「お嬢様」は母親などから、しかるべき言葉遣いやマナーを学ぶのである。私の母(1920年生まれ阪神間育ち)のエピソードで恐縮だが、祖母が女中(あえて当時の言葉を使う)がお使いから帰ってくると常に「ご苦労さん」と声を掛けるので、小学生だった母も口真似をしたところ、温厚な祖母が激怒した——「小梅どん(女中の名)は、お父さんが雇うたはる人だす。子供のくせに偉そうな口を利きなさんな」。こう叱られたのがよほどショックだったらしく、私の母は86歳で亡くなるまでこの一件を忘れなかった。お転婆で勉強嫌いだった母が周囲から叱られるのは日常茶飯だったにもかかわらず、である。
- 4、お嬢様には知性がある。現代日本においては、保護者の経済力が子供の学力(つまり偏差値)に比例すると言われている。確かに大阪府立大学に「お坊っちゃん顔」とともにピアノを弾く趣味を持つ学生が増えたのも、これと似たような理由によるものであろう。この傾向は「ゆとり世代」においては顕著であるように思われる。けれども受験勉強ができるのと、グローバル社会で通用する教養やマナーとは、次元が異なる。極端に言えば、「お嬢様」に「学歴」は不要である。故ダイアナ妃も三笠宮の信子妃も大学卒ではない。昭和初期の「お嬢様」の多くは最終学歴が女学校だったはずだ。それでも、現代の一流大学学生に決して劣らない教養とマナーを修得している。それこそが本当の「知性」ではあるまいか。『華麗なる一族』の娘たちのように、

たとえ英語やフランス語にしろ、受験勉強やビジネスのためではなく、「社交」を楽しむために学ぶのが「お嬢様」なのだ。

- 5、お嬢様は怖いもの知らずである。お嬢様は囲まれた世界とその延長線上で生まれ育ったので、当然ながら「世間知らず」となる。知らないので恐がらない。もちろん「我が儘」や「自己中心」とみなされることもある。私も神戸女学院で12年間学んだために大阪府立大学で話が（合わないのではなく）通じなかったことがある。欠席続きだった留年生を落としたところ、当時の学生部長から「あの学生のゼミ担当は、ヨヨギだから気をつけるように」と非難口調で注意されたのだ。このとき、私は心の中で「代々木ゼミナールの関係者？怒らせるとそこからの受験生が減るとか？でもあの予備校の御曹司なら、私、間接的なつながりがあるから取りなしてもらえし」と真面目に考えた。「ヨヨギ」が予備校を指すものでないことは、それから半年後に知った。だが、なぜ気をつけなくてはならないのかは、今もって理解に苦しむ。お嬢様ではなくとも「お嬢様学校」で長年学ぶと、このような結果となる実例である。文学では『小公女』のセーラは、かなり「我」が強く、環境が変わっても怖いもの知らずで生き抜く力を持っている。

- 6、お嬢様は役に立たない習い事をする。かつて女子大学に就職には不利な「文学部」がつきものであったように、お嬢様に求められる経済活動は大いなる「消費」だけであった。「生涯賃金」などとは無関係に生き、一般人が一生かかって稼ぐ以上の財産が相続できる。生前贈与されたり、ときには名前だけの同族会社役員として実労働なしに報酬を受けることも珍しくない。従って、大学も含め「習い事」が将来、自分たちの口を糊する手段には結びつかない。その意味で「役に立たない」のである。ピアノ、ヴァイオリン、日舞、茶道、華道、料理——すべて「お嬢様芸」の域を出ない。いや、かつての名家では才能があっても「プロ」にはならせなかったものである。しかしこのような女性

たちが「文化」を伝えてきたのであり、すぐに「実用」や「換金性」を強要される時代に「お嬢様」が激減するのは当然の結果であろう。

- 7、お嬢様は贅沢だがケチである。気に入ればハリー・ウインストンで大粒ダイヤモンドを購入しても、納得がゆかなければ、どんな少額の出費も拒否するのが（元）お嬢様だ。だから周囲はこの意外な言動に「ケチ」と思うだろう。「それくらいの金額で文句を言うのは格好悪い」と一般人が考えて素直に出すときでも、お嬢様はそれを「格好悪い」とは思わない。お嬢様は何をしても「格好良い」のである。「ケチ」と思われることにも、全く抵抗はない。「日本のビバリーヒルズ」と呼ばれる芦屋でもニューリッチ族はいざ知らず、昔からの金持ちたちは贅沢好きのいっぽうで「ケチ」である。それを勘違いで失敗する小売店・飲食店は芦屋に多い。
- 8、お嬢様は流行を追わない。ときには野暮ったいと思われる服装をしていることもあるが、流行に左右されないのがお嬢様だ。ファッション誌に惑わされることなく、オシャレにおいても自分の好みを貫く。母親のテイストを受け継ぐことも多いが、昭和初期、「和」から「洋」へのライフスタイルの過渡期に、「和」で育った母親が「洋」の決まり事を娘に教えられず、そこでファッション誌や一部の洋裁学校にお嬢様が集まった。まもなくきな臭い時代が始まり、外出時にはお嬢様ももんぺをはかなければならなくなるが、恐いもの知らずのお嬢様が服装でトラブルを起こしたエピソードはある。
- 9、お嬢様は芸能人に興味はない。なぜなら自分たちは芸能人を雇う側にいるという環境で育つからだ。「スター」は芸能人ではなく、自分たちだと思っている。この感覚を理解しているので、高級ブランド店も顧客の極めて排他的集いには、決して芸能人を客やアドバイザーとして招いたりはしない。余興でジャズシンガーが歌っても、終わればすぐに姿を消し客と混じることはない。主役は大金を払える顧客であ

り、このようなイベントにお嬢様は母親に連れられて来ることが多い。

- 10、お嬢様は玉の輿に乗ろうとしない。積極的にそのような婚活をしなくても、自分と同じレベルの相手なら、世間的には十分に「玉の輿」である。ただお嬢様は結婚前から玉の輿に乗り馴れていただけだ。そのように無難な結婚で一生を何不自由なく送るお嬢様も多い。だが「怖いもの知らず」で、親の反対を押し切って「駆け落ち」した例が、神戸女学院の同級生の中でも3件あった。しかも揃って本物のお嬢様に分類できる女性ばかりである。結婚相手の選択において計算高いのは、偽お嬢様、お嬢様タイプの悪女なのかもしれない。

このように書き並べてゆくと、多少の矛盾も生じるかもしれないが、所詮、人間は正反対の部分を兼ね備えた存在である。その人間たちが作り上げる社会、あるいは文学世界の中で、今後とも「お嬢様」をひとつのキーワードとして、女性の生き方を考え続けたいのである。

注) 本論は2012年11月17日、第4回女性学講演会「お嬢様と悪女——比較文学的に考える」での話をもとに加筆・改稿したものである。